

# Accounting, Arithmetic & Art Journal



The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

1992. 11



## 第6回会計史家国際会議開催される

平成4年8月20日から22日にかけて、京都・蹴上の都ホテルにて会計史家国際会議 (The Sixth World Congress of Accounting Historians) が開かれました。当協会々員では20日の佐々木重人先生 (専修大学) の <The Development of the Japanese Railway Accounting System; the Japanizing Process of the British System, 1885-1950. > にはじまり、21日の岩邊晃三先生 (埼玉大学経済短期大学部) <Bookkeeping and History in Japan>、次いで片岡泰彦先生 (大月市立短期大学) <The Relationship between the Bookkeeping systems of Pacioli and Schweicker >、そして22日最終日マテシッチ先生 (ブリテッシュ・コロンビア大学) <On the History of Normative Accounting Theory; Paradigm Lost, Paradigm Regained? > の各報告があり、活発な論議がなされた。

なお、マテシッチ先生は本年5月にもご夫妻で来日され、早稲田大学を皮切りに拓殖大学と中央大学で講演され、約一か月滞在されました。来日は今回で4度目、京都は2度目のことです。ブリテッシュ・コロンビア大学でお世話になった小口好昭先生 (中大) や岡本治雄先生 (拓大) の案内で、短い古都の観光を楽しまれ、帰国の途につかれました。主催者・発表者・協賛者のみなみなならぬ努力に感謝し、参加者各様の思い出を残して、2年後の1994年『スママ』出版五百年祭にはヴェネチアで、1996年カナダにて、2000年スペインでの再会を約束して散会しました。



## お知らせ

平成5年度・第3回フォーラムは大東文化大学のご厚意で、5・6月頃、同大学板橋校舎で開催される予定です。また翌年 (1994) ヴェニスで開催される「スママ」出版500年祭 (第7回会計史家国際会議など) に参加し、パチョーリの遺跡を巡る旅行 (pilgrim) を計画しています。次回フォーラム開催時までには概要を報告いたします。

なお、本誌の発行は年2回を予定しています。随想、旅行記などふるってご寄稿ください。



# わが国におけるパチョーリ研究の歴史

立教大学 茂木虎雄

ルカ・パチョーリはイタリア・ルネッサンス期に活躍した数学者であるが、1494年に史上最古の簿記書を記した文化人でもある。これは有名な『算術・幾何および比例全書』(Luca Pacioli, *Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita*, 1494)であるが、その一部に簿記論 (Particularis de Computis et Scripturis=計算・記録詳論)があつて、これが印刷された複式簿記論の最初のものである。

複式簿記は14・5世紀の北イタリアで形成されたと会計史の学界ではいわれているが、その一つの証明がこのパチョーリ簿記論であつた。複式簿記実践があつたから簿記論も書かれた。複式簿記の生成は同時に確立であつたとA.C.リトルトンは言うほどに、そこには複式簿記の一つの完成体系が、またその説明が系統的になされている。これは簿記技法の単なる入門的解説をこえて、簿記実務の指導書でもあつた。それゆえに、パチョーリが後世に高く評価されるのであつた。

この簿記書の紹介・翻訳と研究が、わが国でどのように展開したであろうか。その歴史をたどり、現状と今後の方向をさぐるのが、本報告(講演)の主目的である。

## I

パチョーリの名は明治初期にわが国に伝わっている。パチョーリの名とその簿記書の事が伝えられるということは14・5世紀の研究、すなわち会計史研究の萌芽があつたということである。複式簿記法 [=洋式簿記法] の実践がまた緒についたばかりの頃に、歴史研究が起つたことは、日本の会計史の研究史において注目すべきことである。これは青雲時代で、本格的な研究は大正期における平井泰太郎氏(後の神戸大学名誉教授)の訳業『「ばちおり簿記書」研究』(『会計学論叢』第4集・大正9年[1920])から始まる。

平井氏の翻訳は、パチョーリの中世イタリア語の原典そのものからでなく、1914年のJ.B.ゲイスピークによる英訳によつた。しかし、この本とて当時はそしてつい最近までまことに数の少ない稀覯本であつた。36章ある簿記論を全訳し、解説したのである。この研究について太田哲三教授(一橋大学教授)は「ゲイスピークはその簿記の部分を英訳したのであるが(この英訳はE. イーガーの独訳によるが一茂木)その訳本でさえそうざらにある本ではない。けれども年少の一学生の身でそれを完訳した努力については、当時すべてが驚嘆し、また敬服していたのである。」と昭和31年にのべている。その翻訳は神戸高等商業学校(現神戸大学)の学生時代の卒業論文と聞く。

パチョーリの研究史は邦訳の歴史である。簿記論部分のみではあるが、『ズンマ』(Summa……)を紹介したのは会計学者であつて、その先駆をつとめられたのが平井氏である。また当時、『ズンマ』の原典のわが国唯一の所持者でもあつた。平井氏は翻訳の「解題」で「近世簿記法の創始は、15世紀末葉、ルーカス・パチオリの『ズムマ』の編述にあり。彼の書一度出でて、伊太利式簿記の系統的組成始めて全く、此人一度出でて、近世企業は其最も完全なる発達に適応したる記帳技術の方法を得たりと云ふを得べきものなり」(「研究」77ページ)とされるが、複式簿記の系統的組成はじめて全く……、とされるころはパチョーリ簿記書の歴史的意義を適確に指摘されている。これが複式簿記史とパチョーリ研究が同義的に解されるころでもある。

## II

会計史研究は第二次大戦後に本格化する。戦争中の抑圧のなかで、学問研究の良心は静かに歴史研究へと向かう。それが敗戦を機に活発化するが、マルクス主義研究の自由化も影響しているかとも思う。戦中から引きつがれた仕事は片野一郎教授のリトルトン会計史の翻訳であり、また片岡義雄教授のパチョーリ翻訳であるし、山下勝治著『損益計算論損益計算制度の発展』（泉文堂・昭和25 [1950] 年）であろう。そして本邦初の複式簿記生成発達史が、江村稔教授（当時、東大助手）によってまとめあげられた。このようななかで、片岡義雄『パチョーリ「簿記論」の研究』（森山書店・昭和31 [1956] 年）が公刊された。

片岡義雄教授の翻訳。簿記論部分の全訳として、平井教授につぐものであるが、平井氏がゲイスビークによったものに対して、片岡訳はさらに1933年の独訳、B.ペンドルフと、1924年の英訳、P.クリブリによって、三訳書を比較・検討して、邦訳を行う。片岡教授はペンドルフ、クリブリを高く評価している。三著を忠実に比較した訳出は、パチョーリ邦訳の定本（古典）となっている。

この解説のなかで「損益勘定は、現今のように営業年度ごとに作成するのではなくて、各冒険商売の終了するごとに、これを作成した」とされて、口別損益計算の仕組みがパチョーリによって示されたことを教えている。片岡教授は、三訳書、全部を所有されたのではなく、借り出したものもあって自由に使用できなかった困難を述べている。戦後の劣悪な研究条件のなかで、よくも完成された。

片岡教授はこの研究において、原典には直接当たっておられない。当時平井教授のこの原典は門外不出とされていたようである。ゲイスビークには写真版で原典の複製があることはあったが。

パチョーリ研究者にとっては原典に接することは大きな意義がある。原典の持つ味わい。ズンマ全体ではないが、西川孝治郎教授（当時、三菱石油重役）によってロンドンの大英博物館所蔵のズンマのうち簿記論部分が複製（復刻）された。西川孝治郎編『複製・パチョーリ簿記論』（森山書店・昭和34 [1959] 年）である。複製本は西川氏の私費出版である。西川教授は昭和34年に日本会計研究学会でも、スライドによってパチョーリ原典のおもかげを伝えたが、「当時は原典の面影をしのぶことも容易ではなかった」といわれているが、これがみられるようになった。日本のパチョーリ研究史上の画期的な業績である。これが基根となったか、平井博の定年と重なってか、昭和36 [1961] 年の日本会計研究学会第20回大会で、平井教授出品による「パチョーリ展」が神戸大学六甲台学舎において開かれた。パチョーリ原典が遂に公開された。若輩の筆者（茂木）も感銘深く拝見した。これを機に会計史研究も若手に中心が移ってきたと実感した。平井教授はどのような思いで公開したであろうか。

原典に向かう！この思い、願いは昭和48 [1973] 年に、小島男佐夫教授によってコロンビア大学所蔵の原典を、数学部分まで含めて全巻の複製（原寸大）がなされた。これは「小島版」ともいえるもので、京都の大学堂より150部出版された。この頃まで全世界に99冊の初版があるといわれるなかで、日本で150部の復刻がなされた。小島版によって原典全体が極めて身近なものとなった。新しいパチョーリ研究が始まると同時に、イタリア語（中世イタリア語）をマスターして原典に取り組みねば研究とは言えない状況が出現したのである。そしてさらに、数学部分、これはズンマも95%を占めるが、これを見ることができるようになった。会計史と数学史の交渉が求められるが、今後の課題として登場した。

### III

原典、直訳時代の到来。平井、片岡両教授によってパチョーリ簿記論の研究はほぼ完成した。訳書よっての研究ではあるが、パチョーリは十分に把握できるようになった。昭和40年代に入ると井上清教授（埼玉大）をはじめ本格的にイタリアに注目する学者は多くなった。昭和47年春、泉谷勝美教授（大阪経大）のイタリアに1年間の長期留学はイタリア簿記史研究に大きな意義を持つ。このことがパチョーリ原典研究にも及ぶ。

昭和末期の三つの直訳。その第一は本田（富）耕一訳『パチョーリ簿記論』（現代書館・昭和50[1975]年6月）である。これはパチョーリの1523年の第2版をもとに直訳したものである。全訳としては3番目で、最初の直訳がなされた。これはイタリア経済史家も注目したものである。

1523年の第2版は、どのくらいの冊数があるものであろうか。わが国でも個人で所有している方がいると聞いている。大正末期から昭和初期にかけて初版、2版をとともにもっている学者は平井泰太郎教授ただ一人であった。初版といわれるものは、今日、わが国では7巻あるが。この第2版、西川孝治郎教授（日大）所蔵本によって本田氏は翻訳を進められたのである。

ついで岸悦三教授の訳。これは岸悦三著『会計前史—パチョーリ簿記論の解明—』同文館、昭和58[1983]年7月）で、第1部が「パチョーリ簿記論の解明—会計所有主会計の簿記論—」、第2部は「代理人会計の展開—会計進展のモニュメント—」であるが、第1部の第4章が「資料『パチョーリ簿記論』」であって、本書の中心をなす。「第1部では『簿記の父』パチョーリの論を直接、原典に即して考察、吟味してその全貌を明らかにせんとした」（序 1ページ）もので、「本資料は、中世イタリア語パチョーリ簿記論の原典よりの岸による直接の全訳である」という。ここに第2の直接訳が出たが、この原典は何であらうか。筆者の推測では小島複製版かと思うが。

直訳第三番目が、片岡泰彦著『イタリア簿記史論』（森山書店・1988[昭和63]年4月）である。第1部は「実践簿記の生成」、第2部が「パチョーリ簿記論—理論簿記簿成立」、そして第3部「簿記文献への発展—理論簿記の例証」からなるが、その第2部で、邦訳を試みる。筆者が片岡泰彦教授に聞いたが、典拠は小島複製版とのこと。

ここに昭和末期の三直訳が出そろった。そして、世は平成へと移ってゆくが、1989[平成元]年に雄松堂よりもう一つの初版の復刻版が170部出版された。わが国はまことにパチョーリ大国で、原典の味に容易に接することができることになった。それだけに後学のわれわれは大きな課題を背負う。

### IV

パチョーリ簿記書の復刻と翻訳の歴史を見てきた。研究の素材は充分にととのった。平井泰太郎、片岡義雄の両教授によってパチョーリ研究の会計史的意義はすでに明らかにされており、江村、西川、小島教授の研究もあるが、今後の方向についてみよう。

パチョーリ簿記書のあり様は充分に知らされたのであるが、パチョーリは36章にわたる複式簿記論を、なぜ示されたような構造（体系）で説いたのか、また説かざるを得なかったかを、15世紀のイタリア[ベニス]の簿記実践との関連で見直すことが必要であらう。存在する姿を明らかにして、その姿をとる論理を明らかにしてこそ歴史論として昇華するであらう。ズンマ全体が原典やその復刻によって明らかになった。ズンマは本来、数学書である。パチョーリは簿記学者としてよりも、数学者である。数学の面が研究できるようになった。これは平井氏、片岡義雄教授時代と資料の量がことなっている。数学の議論をどのように理解するか、これには数学史の助けが必要であるが、会計と数学の両面からパチョーリに迫ることが、パチョーリを全面的に明らかにすることになるであらう。この学際的研究がパチョーリ研究の今後の方向であらう。いまここに「日本パチョーリ協会」ができた。協会の発展はパチョーリ学の発展でもある。同学の諸兄の御活躍を祈って……。

（大東文化大学教授・立教大学名誉教授）

〔付記〕筆者・茂木は三代川正秀教授より、パチョーリの数学にふれたロバート・ロウラー著・三浦伸夫訳『神聖幾何学』（平凡社）を教えられ、本書を贈られた。数学部分の研究は相当になされていることを改めて知った。「科学史」の問題として複式簿記のパチョーリを解明したく。



## この絵の行方を知りませんか？



画面中央で絵筆を持って、手前の二人の来客にイーゼルのモナリザ像を説明するレオナルド・ダ・ヴィンチ、モデルを務めるイザベッラ・デステ(?)は楽団に囲まれて安らいでいる。右側の来客がパチョーリ、左はウルビノ侯グイドバルトと思われる。1924年、当時ヨーロッパに留学されていた故田宮喜代蔵博士(経済学・神戸大学名誉教授)がミラノのサンタマリア・デル・グラツィエ教会のダ・ヴィンチ<最後の晩餐>を鑑賞しての帰路、骨董屋にあったこの色刷りの絵を見付けて、乞われるままの代金を払って購入したものだとい

う。その後小島男佐夫教授の撮られたこの写真が『簿記史論考』や平井泰太郎先生追悼記念事業会刊行『種を播く人』、本田耕一著『パチョーリ簿記論』などに転載されている。宮田博士は1977年7月7日永眠されて、その後のご家族の消息とこの絵画の行方が不明となっています。どうか消息等をご存知の方は事務局まで御一報ください。



## 会 員 名 簿

平成4年11月28日現在

茂木虎雄	大東文化大学	(会計学)
岩邊晃三	埼玉大学経済短期大学部	(会計学)
岡本治雄	拓殖大学	(会計学)
片岡泰彦	大月市立短期大学	(会計学)
金井 正	創価女子短期大学	(会計学)
鈴木一道	大東文化大学	(会計学)
種田勝正	日本大学法学部	(会計学)
高橋敏夫	拓殖大学	(数学・コンピュータ)
斎藤幹朗	千葉短期大学	(会計学)
濱田弘作	千葉商科大学	(会計学)
松井隆幸	拓殖大学	(会計学)
松浦千誉	拓殖大学	(イタリア民法)
杉田淳子	山陽学園短期大学	(生活科学)
松尾敏充	大東文化大学	(会計学)
増田英敏	拓殖大学	(税 法)
三代川正秀	拓殖大	(会計学)
森 久	明治大学	(会計学)
吉沢英一	浦和短期大学	(会計学)
須藤 満	建築士	(建築学)
寺坪 修	公認会計士	(会計学)
太田健雄	浜松女子高校	(会計学)
佐々木昭久	千葉短期大学	(会計学)
小宮靖夫	川口短期大学	(会計学)
福島千幸	立教大学	(会計学)
岩井 敏	公認会計士	(会計学)
岡下 敏	青山学院大学	(会計学)

大河原誠	(株) 東海	
大崎美由紀	税理士	(会計学)
笠井昭次	慶応義塾大学	(会計学)
門田矩元	税理士	(会計学)
木内佳市	京都学園大学	(会計学)
河野一英	大東文化大学	(会計学)
久野秀男	学習院大学	(会計学)
佐々木重人	専修大学	(会計学)
科野孝蔵	市邨学園短期大学	(日蘭貿易史)
品田 正	東京情報大学	(会計学)
鈴木昭一	拓殖大学	(会計学)
田村寿一	税理士	(会計学)
津田正晃	日本大学法学部	(会計学)
富耕 一	静岡学園短期大学	(会計学)
中村萬次	四日市大学	(会計学)
中西 旭	中央大学	(会計学)
平井克彦	明治大学	(会計学)
泉谷勝美	大阪経済大学	(会計学)
倉茂道德	高千穂商科大学	(会計学)
林 英邦	税理士	(会計学)
浅岡忠彦	東京国際大学	(会計学)
株式会社雄松堂書店		
江村 稔	亜細亜大学	(会計学)
R.V.Mattessich University of British Columbia		
嶋和 重	拓殖大学	(会計学)
関塚 昇	税理士	(会計学)
武田昌輔	成蹊大学	(会計学)

顧問：茂木虎雄

幹事：岡本治雄・松井隆幸・三代川正秀

監事：鈴木一道・種田勝正

The **IP**ACIOLI **S**OCIETY **U**JAPAN

日本バチョーリ協会 〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3955-8783  
The Institute for Management and Accounting/Takushoku Univ. Miyokawa Office